ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド
I, 1, 1—I, 2, 7

湯田　豊

ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド (*Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad*) は全部で6章から構成され，シャタパタ・ブラーフマナ (*Śatapatha-Brāhmaṇa*) の終わりにある。このウパニシャッドは，チャーンドーギヤ・ウパニシャッド (*Chāndogya-Upaniṣad*) とともに最初期の層に属し，全ウパニシャッドのなかでもっとも重要なものである。ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドに対する注釈のなかでもっとも有名なのは，言うまでもなく，シャンカラ (Śaṅkara) のそれである。シャタパタ・ブラーフマナの最後の部分であるブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドには，カーヌヴァ版 (Kāṇva) とマーディヤンディナ版 (Mādhyandina) の二種類がある。シャンカラが使用したのは，カーヌヴァ版である。わたくし自身も，シャンカラの注釈を検討する関係上，カーヌヴァ版を底本とした。アルブレヒト・ヴェーバーは，マーディヤンディナ版に基づいてシャタパタ・ブラーフマナを編集した。わたくしは，マーディヤンディナ版も絶えず参照しながら[1]，ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドのテキストを検討した。わたくしが底本としたのは，通俗的なインド版であるが，学術的に高く評価されるものとしては，V. P. Limaye と R. D. Vadekar の編集した *Eighteen Principal Upaniṣads* (Vaidika Saṁśodhana Maṇḍala, Poona, 1958) がある。わたくしは，*Eighteen Principal Upaniṣads* には最大の注意を払った。

わたくしがここで試みようとしているのは，ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドのなかの若干の箇所を文献学的な手続きを経て，より正確に翻訳しようということである。ウパニシャッドの翻訳は多数存在するが，ここではわたくしはマクス・ミュラー (Max Müller) の英訳[2]，オットー・ベートリンク (Otto Böhtlingk)，パウル・ドイッセン (Paul Deussen) の独訳[3]，およびエミール・スナール (Émile Senart) の仏訳[4]

を検討した。ロバート・アーネスト・ヒューム (Robert Ernest Hume) およびラダクリシュナン (Radhakrishnan) の英訳[5] も参照した。

わたくしはサンスクリットからの翻訳に際しては，マルティン・ブーバー (Martin Buber) がヘブライ語の旧約聖書を独訳する際に踏襲した三原則に忠実であろうと努力した。ブーバーの三原則は，次の通りである。まず第一に，各語は常に，出来得る限り，同一語によって翻訳されねばならない。真に equivalent word を見いだすことは，翻訳者の最大の使命である。第二に，翻訳者は語のルート (root) に迫らねばならない。語のルートの基本的な意味の確認は切実な課題である。最後に，珍語は珍語によって翻訳されねばならない。しかし，ブーバーの三原則に忠実であることは，実際問題として容易ではない。わたくしは，この三原則に出来得る限り従おうとした。

ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドを翻訳する際避けて通れないのは，シャンカラの注釈である。マクス・ミュラーはシャンカラの注釈に隷属してウパニシャッドを訳した。これと正反対に，オットー・ベートリンクはシャンカラの影響を排除して文献学的により正確な訳を試みた。わたくし自身は，特に問題がない限りシャンカラの注釈を採用し，言語的に問題のある場合にシャンカラを離れた。しかし，シャンカラの解釈はウパニシャッドの精神に忠実であるかどうかは別として，独自の解釈を代表しているため，注目に値するであろう。

以下において，わたくしはブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドの原文に基づいて，言語的な問題を徹底的に検討してみたい——

I, 1, 1——om uṣā vā aśvasya medhyasya śiraḥ | sūryaś cakṣur vātaḥ prāṇo vyāttam agnir vaiśvānaraḥ saṃvatsara ātmā 'śvasya medhyasya | dyauḥ pṛṣṭham antarikṣam udaraṃ pṛthivī pājasyaṃ diśaḥ pārśve avāntaradiśaḥ parśava ṛtavo 'ṅgāni māsāś cārdhamāsāś ca parvāny ahorātrāṇi pratiṣṭhā nakṣatrāṇy asthīni nabho māṃsāni | ūvadhyaṃ sikatāḥ sindhavo gudā yakṛc ca klomānaś ca parvatā oṣadhayaś ca vanaspatayaś ca lomāny udyan pūrvārdho nimlocañ jaghanārdho yad vijṛmbhate tad vidyotate yad vidhunute tat stanayati yan mehati tad varṣati vāg evāsya vāk ||1||

I, 1, 1 の原文を綿密に検討する前に，わたくしはここの箇所と対応するタイッティリーヤ・サンヒター (Taittirīya-Saṃhitā), VII, 5, 25 に言及しなければならない。ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド, I, 1, 1 においては uṣā vā aśvasya medhyasya śiraḥ という文句が冒頭に来るが，タイッティリーヤ・サンヒターの当該箇所では，その前に yo vā aśvasya medhyasya śiro veda śīrṣanvān medhyo bhavati という文句が置かれている。そして，タイッティリーヤ・サンヒターのテキストは以下の通りである——uṣā vā aśvasya medhyasya śiraḥ, sūryaś cakṣur, vātaḥ prāṇaś, candramāḥ śrotraṃ, diśaḥ pādā, avāntaradiśāḥ parśavo 'horātre nimeśo 'rdhamāsāḥ parvāṇi, māsāḥ saṃdhānāny, ṛtavo 'ṅgāni, saṃvatsara ātmā, raśmayaḥ keśā, nakśatrāṇi rūpaṃ, tārakā asthīni, nabho māṃsāny, oṣadhayo lomāni, vanaspatayo vālā, agnir mukhaṃ, vaiśvānaro vyāttam ‖1‖ samudra udaram, antarikṣaṃ pāyur, dyāvāpṛthivī āṇḍau, grāvā śepaḥ, somo reto, yaj jañjabhyate tad vidyotate, yad vidhūnute tad stanayati, yan mehati tad varṣati, evāsya vāk. 間もなく，わたくしはタイッティリーヤ・サンヒターの文句をブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドの当該箇所と突き合わせるであろう。

さて，om uśā vā aśvasya medhyasya śiraḥ という文句を検討しよう。この文句の意味は簡単である。「オーム！祭祀に適した馬の頭は，あけぼのである」——このように訳すことが出来る。タイッティリーヤ・サンヒターは，この文句の前に yo vā aśvasya medhyasya śiro veda śīrṣanvān medhyo bhavati（まことに，祭祀に適した馬の頭を知っている人は，頭を持つものとなり，祭祀に適したものになる）という文句を先行させている。Medhya は祭祀に適したという意味である。Medha は祭祀を意味する。Medha に適した，ふさわしい (arha) というのが，medhya である。シャンカラは，このように解釈している。マクス・ミュラーはシャンカラに従って aśvasya medhya を the horse which is fit for sacrifice と訳している。しかしベートリンクは，これを des opferreinen Rosses, ドイッセンは des Opferrosses, スナールは du cheval du sacrifice と訳している。ちなみに，ベートリンク以外の翻訳者は，uṣas（あけぼの）を主語にし，śiras（頭）を述語にしている。サンスクリットには特定の語

順はないから，uṣas を主語と解することは差支えない。しかし，わたくしは一貫して文の最初の部分を述語と解釈して訳した。

しかし，uṣā vā aśvasya medhyasya śiraḥ という文句に関してわたくしが問題にしたいことは，語順の問題ではなく内容そのものである。I, 1, 1 においては，「祭祀に適した馬の頭は，あけぼのである」いうような，A=B という形式の文句があまりにも多い。しかし，馬の頭があけぼのであるということを，われわれは字義通りに解釈することは出来ない。「馬の頭」は決して「あけぼの」と同一ではないからである。この問題を論じる前に，わたくしは一般的な考えを紹介して置く必要がある。例えば，タイッティリーヤ・ブラーフマナ (Taittirīya-Brāhmaṇa), II, 1, 5, 2 によれば，「祭柱は太陽である」(ādityo yūpaḥ) という文句がある。しかし，祭柱と太陽を同一視することは許されない。祭柱と太陽が異なっていることは，誰の目にも明らかであるから。ミーマーンサーの概論として有名な『アルタ・サングラハ』(Artha-saṃgraha) は，「祭柱は太陽である」という文句を，次のように説明している——「祭柱が太陽と異ならないことは知覚によって論駁されるから，この間接的な表現法によって太陽のように輝いているということから成る，(祭柱の) 性質が説明される」[6] と。要するに，「祭柱は太陽である」という際，ここで意図されているのは，この両者がある特定の共通性をもっているということである。

Uṣā vā aśvasya medhyasya śiraḥ という際，実際に意味されているのは何であろうか? Uṣas は「あけぼの」，Morgenröte である。ウシャスは，太陽 (sūrya) が昇る約 45 分前の空の状態を指している。それゆえ，ウシャスは日 (ahan) の「始まり」である。一日の「始まり」は，いわば「一日の頭」である。頭は最初を意味するからである。「祭祀に適した馬の頭」と「あけぼの」の間には一つの共通性が見られる。最初のもの・始まりは重要なものである。シャンカラは，ウシャスと祭祀に適した馬の頭が重要なものである (prādhānya) 点に，両者の共通点を見いだした。

Uṣas の次に来るのは，朝日である。太陽が昇れば，ウシャスは消滅する。われわれは，sūryaś cakṣur vātaḥ prāṇo vyāttam agnir vaiśvānaraḥ saṃvatsara ātmā 'śvasya medhyasya という文句に接する。Sūryaś cakṣur という文句は，「眼は太陽である」と訳される。眼と太陽の対応関係は，リグ・ヴェーダ以来知られている。「あけぼの」の直後に来るの

は太陽 (sūrya) である。馬の頭の直後に来るのは，それの眼である。シャンカラは，この点に関して「太陽は頭の直後に来るものであるから，また，眼は太陽をその神格としているから」と述べている。わたくしは，太陽が眼の神格であるという，神話的な発想法はここの箇所と無関係であると考える。ここでは，ウシャスの次に来る「太陽」と，馬の頭の直後の「眼」とが共通である点に注目したい。また，vātaḥ prāṇo という文句も，リグ・ヴェーダ以来知られている。祭祀に適した馬の息 (prāṇa) は，(vāta) にほかならない。シャンカラは，「息は風である」という文句を，「風を固有の性質としているから」と解釈する。Vyāttam agnir vaiśvānaraḥ という文句を，われわれはタイッティリーヤ・サンヒターの当該箇所と比較して見る必要がある。そこでは，agnir mukhaṃ, vaiśvānaro vyāttam となっている。しかし，ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドの文句の方が自然である。Vyāttam という語は口 (mukha) を暗黙のうちに含んでいる。シャンカラは vyāttam を vivṛtaṃ mukham (開かれた口) と注釈している。Agnir vaiśvānara を，わたくしは「普遍的な火」と訳した。Vaiśvānara は agni を修飾する形容詞である。シャンカラは，この文句に関して，次のように述べている——「vaiśvānara という語は，agni という語の形容詞である」，と。それゆえ，vyāttam agnir vaiśvānaraḥ は，「開かれた口は，普遍的な火である」，と訳される。

Saṃvatsara ātmā 'śvasya medhyasya という文句は，難解である。なぜなら，ātman が何を意味するかは明らかでないからである。マクス・ミュラーはここの箇所のアートマンを the body，ベートリンクとドイッセンは der Leib と訳している。彼らの訳はみな，シャンカラの注釈に基づいている。シャンカラは，ātmā śarīram (アートマンは身体である) と明快に注釈している。わたくしは，saṃvatsara ātmā を ṛtavo 'ṅgāni と比較させたいと思う。Saṃvatsara は一年ないし歳のことである。一年には 12 箇月ないし 13 箇月ある，とシャンカラは言う。確かに，一年は 12 箇月という名の部分をもつものである。一年・歳は部分ではない。歳の部分として，われわれは六つの季節 (ṛtu) を知っている。春，夏，雨季，秋，冬，および寒冷期が，すなわち，それである。さらにまた，すでに述べたように，一年には 12 箇月がある。もしも季節や歴月が部分であるとすれば，歳は部分をもつものである。「祭祀に適した馬の身体 (アートマン) は

歳である」という文句は，馬のアートマン(身体)と歳が部分をもつもの・全体的なものという点で共通していることを表現している。

Dyauḥ pṛṣṭham——(祭祀に適した馬の) 背は，天である。シャンカラによれば，両者には「上にあることが共通している」のである。Antarikṣam udaram——「その腹は，空である」。腹も空も，そのなかに場所がある点で共通している。つまり，両者とも「うつろ」である。シャンカラは両者とも「うつろという点では共通であるから」と述べている。問題になるのは，その次の文句である。そこでは，pṛthivī pājasyam という文句が見いだされる。この pājasya ということばは，意味が明らかではない。シャンカラは pājasya を pādasya と読み，足の場所，すなわち，蹄と解釈している。しかし，マクス・ミュラーはここではシャンカラの解釈に追従せず，pājasya を chest (胸) と訳した。ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド，I, 2, 3 には次のようなことばがある——dyauḥ pṛṣṭham antarikṣam udaram iyam uraḥ, と。マクス・ミュラーはこの文章に拠って，pājasya を胸と訳した。確かに，iyam は pṛthivī を意味する。ベートリンクは pājasya を seine Weichen, ドイッセンは seines Bauches Wölburg, スナールは le bas-ventre と訳している。わたくしは，スナールの訳が正しいと思う。ヴァージャサネーヤ・サンヒター (Vājasaneya-Saṃhitā), 25, 8 に，今，問題になっている語が見いだされる。この語に対して，ウヴァタとマヒーダラが注釈を施している。その注釈によれば，pājasya とは pājase balāya hitam である。つまり，pājasya とは balakam aṅgam (力を生み出す身体の部分) であり，われわれ日本人が「臍下丹田」と名づけるものを指すのである。つまり，pājasya は「下腹部」のことである[7]。このような理由から，わたくしは pṛthivī pājasyam を「その下腹部は大地である」と翻訳する。大地と下腹部の共通性については，シャンカラは触れていない。しかし，わたくしはこの二つは下にあるという点で共通していると思う。

Diśaḥ pārśve avāntaradiśaḥ parśava には，特に問題はない——「その両脇腹は方角である。その肋骨は中間の方角である」。シャンカラによれば，次の通りである——「方角は四つではあるけれども，両脇腹である。両脇腹によって方角と結びつけられているから。脇腹と方角の数は等しくないから，それは正しくないのではないかというならば，そうではない

（とわれわれは答える）。馬はすべての方角を向くことが可能であるから，両脇腹によってすべての方角と結びつけられるから，（われわれの考えには）過失はない」，と。シャンカラによれば，中間の方角 (avāntaradiśaḥ) とは，南東 (āgneyī) などである。

Ṛtavo 'ṅgāni māsāś cārdhamāsāś ca parvāṇy ahorātrāṇi pratiṣṭhā nakṣatrāṇy asthīni nabho māṃsāni——「その四肢は季節である。その関節は，月と半月である。その足は，昼と夜である。その骨は星である。その肉は雲である」。

「その四肢は季節である」という箇所を，シャンカラは「歳の部分であるため，それは四肢と性質を等しくしているから」と説明している。季節と馬の四肢は，それぞれ部分であるという点で共通である。「その関節は，月と半月である」——関節は連結するものである。（暦の上の）月と半月とは歳の諸部分を連結するが，馬の関節もその四肢を連結する。馬の関節と月と半月とは「連結するという点で共通であるから」(sandhisāmānyāt) とシャンカラは述べている。タイッティリーヤ・サンヒターにおいては，ardhamāsāḥ parvāṇi, māsāḥ saṃdhānāni となっている。ここでは，関節は半月であり，連結 (saṃdhānāni) は月である。

Ahorātrāṇy pratiṣṭhā——「その足は，昼と夜である」。ここで pratiṣṭhā という語の意味は，「足」である。シャンカラは pratiṣṭhā pādāḥ と注釈している。馬がみずからの足で立っているように，時を本質とするものも昼と夜によって立っている——シャンカラは，おおよそこのように考えている。要するに，馬の足と昼夜の間には共通性が見いだされるというわけだ。「その骨は星である」(nakṣatrāṇy asthīni) という文句も同様である。骨も星もともに白い。白いという点から見れば，両者の間には共通性が見られる。シャンカラは，「白いという点で共通しているから」と述べている。「その肉は雲である」(nabho māṃsāni) という場合にも，われわれは馬の肉と雲の間に共通性を見いだすことが出来る。雲は水を注ぎ，腹のなかの肉は血を注ぐ。この点において，馬の肉と空の雲とは共通している。馬の肉と空の雲とは，水ないし血を注ぐ行為を行なうという点では共通している。

Ūvadhyaṃ sikatāḥ sindhavo gudā yakṛc ca klomānaś ca parvatā oṣadhayaś ca vanaspatayaś ca lomāny——その胃の内味は，砂である。

その内臓は河である。その肝臓と肺臓は，山岳である。その毛髪は，草木と樹木である。

Ūvadhya を，シャンカラは「腹(＝胃）のなかにある未消化の食物」と注釈している。しかし，ūvadhya は，リグ・ヴェーダ以来，胃と内臓の中味として確定されている。シャンカラによれば，「胃のなかの未消化の食物と砂とは，ざらっとした部分から成る点で共通である」。「その内臓は河である」という文句は，容易に類比される。Gudā は複数形として用いられている。単数形の guda は，腸を意味する。腸と河は，それぞれ胃のなかの食物および水を運ぶ点で共通である。もっとも，シャンカラは gudā を血管と解釈している。彼によれば，河と血管の二つは「流れるという点で共通しているから」という結論が得られる。「その肝臓と肺臓は，山岳である」という文句を，シャンカラは「山岳は堅いものであるから，また，高められたものであるから」と注釈している。つまり，彼の考えによれば，肝臓と肺臓の二つは，堅くて高められているという点で共通しているということになる。「その毛髪は，草木と樹木である」ということについても，同じことが言える。草木は小さい植物，樹木は大きい植物である。タイッティリーヤ・サンヒターの当該箇所には，次のように述べられている——oṣadhayo lomāni, vanaspatayo vālā。ローマ (loma) というのは短かい毛髪であり，ヴァーラー (vālā) というのは長い毛髪である。それは尾の長い毛髪を意味する。しかし，馬の毛髪と草木・樹木とは共通していると言えるであろう。

Udyan pūrvārdho nimlocañ jaghanārdho yad vijṛmbhate tad vidyotate yad vidhūnute tad stanayati yan mehati tad varṣati vāg evāsya vāk ||1||——(馬の）前の部分は昇りつつある太陽であり，後の部分は沈みつつある太陽である。シャンカラの注釈によれば，馬の前の部分（＝直訳すれば，前の半分）とは，ヘソより上の部分，昇りつつある太陽は正午までを指す。沈みつつある太陽とは，正午よりも後を指して言う。馬の前後の部分および日の出と日没とは「前と後という点で共通である」ということになる。そして，「馬が口を開くことは，稲光りすることである。それが身体を震わすことは，雷鳴がとどろくことである。それが尿をすることは，雨が降ることである。それのことばは，ことばにほかならない」のである。「馬が口を開くことは，稲光りすることである」という文句に対応するこ

とばは，タイッティリーヤ・サンヒターの当該箇所に見いだされる。しかし，ここの文句は，ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドのテキストと若干相違している。われわれが今扱っているテキストでは yad vijṛmbhate tad vidyotate となっているのに，タイッティリーヤ・サンヒターでは yaj jañjabhyate となっている。Vijṛbhate をシャンカラは gātrāṇi vināmayati vikṣipati（手足を折り曲げて振るう）と注釈しているが，アーナンダギリはシャンカラの注釈に対する副注のなかで vijṛmbhanaṃ mukhaṃ vidārayati と注釈している。わたくしは，アーナンダギリに従って，vijṛbhate を「口を開く」と訳した。「馬が口を開くことは，稲光りすることである」という文句を，シャンカラは「稲光りと（馬が）口を大きく開くこととは共通しているから」と注釈している。「それが身体を震わすことは，雷鳴がとどろくことである」という文句については，シャンカラは次のような注釈を施している——「それが手足を震わすことは，雷鳴がとどろくことである。（馬の）いななきは音であるという点では（雷鳴と）等しいから」，と。「それが尿をすることは，雨が降ることである」——この文句の原語は yan mehati tad varṣati である。これをマクス・ミュラーは when it makes water, it rains と訳した。同様に，スナールも quand il pisse, il pleut と訳した。しかし，馬が尿をすれば雨が降るというのは，原文の誤読である。ベートリンクとドイッセンは，ミュラーなどとは違った訳をしている。ベートリンクは，問題の箇所を sein Harnen——das Regnen，ドイッセンは was es wässert, Regen と訳している。ここで意味されているのは，馬が尿をする行為と雨が降る現象は，ともに水を注ぐという一点で共通しているということだけである。馬が尿をすることは水を注ぐことと共通しているから，雨が降ることと並置されたのであって，馬が尿をするから雨が降るということが意味されているのではない。「それのことばは，ことばにほかならない」——この文句については，説明の必要はないであろう。

ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド，I, 1, 1 については，以上のようにわたくしは若干の説明を加えた。ここで，あらためてその訳を提示して置こう——

I, 1, 1（訳）——オーム！祭祀に適した馬の頭は，まことにあけぼので

ある。その眼は太陽である。その息は風である。その開かれた口は，普遍的な火である。祭祀に適した馬の身体は歳である。(祭祀に適した馬の）背は天である。その腹は空である。その下腹部は大地である。その両脇腹は方角である。その肋骨は，中間の方角である。その四肢は季節である。その関節は月と半月である。その足は，昼と夜である。その骨は星である。その肉は雲である。その胃の中味は，砂である。その内臓は河である。その肝臓と肺臓は，山岳である。その毛髪は，草木と樹木である。前の部分は昇りつつある太陽であり，後の部分は沈みつつある太陽である。それが口を開くことは，稲光りがすることである。それが身体を震わすことは，雷鳴がとどろくことである。それが尿をすることは，雨が降ることである。それのことばは，ことばにほかならない。

I, 1, 2——ahar vā aśvaṃ purastān mahimā 'nvajāyata tasya pūrve samudre yonī rātrir enaṃ paścān mahimā 'nvajāyata tasyāpare samudre yonir etau vā aśvaṃ mahimānāv abhitaḥ sambabhūvatuḥ | hayo bhūtvā devān avahad vājī gandharvān arvā 'surān aśvo manuśyān samudra evāsya bandhuḥ samudro yoniḥ ||2||

まず最初に，ahar vā aśvaṃ purastān mahimā 'nvajāyata という文章を検討しよう。Mahiman は偉大さ，力，能力などを意味することばであるが，優れて祭祀の際に使用される特殊の容器である。黄金製の器と銀製の器という二つの種類が祭祀では使用される。黄金の容器は昼，銀の容器は夜と共通していると考えることが出来る。シャンカラは，「黄金の容器は昼である。輝くという点では（両者は）共通しているから」と注釈している。ここのテキストに相当するタイッティリーヤ・ブラーフマナの箇所は ahar vā aśvasya jāyamānasya mahimā purastāj jāyate である。シャタパタ・ブラーフマナ (Śatapatha-Brāhmaṇa) XIII, 2, 11, 1 によれば，prajāpatir akāmayata—mahān bhūyān syām iti. sa etāv aśvamedhe mahimānau grahau apaśyat と述べられ，mahiman が graha を意味することは明瞭である。タイッティリーヤ・ブラーフマナによれば，mahiman が主語である。ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドにおいても，わたくしは mahiman を主語として理解する。もしも，

そう解釈すれば，ahar vā aśvaṃ purastān mahimā 'nvajāyate を次のように訳すことが出来るであろう——まことに，馬の前に置かれた(金の)杯は，昼として馬の後に生まれた，と。ベートリンクは mahiman を主語として解釈したが，マクス・ミュラ，ドイッセンの両学者は ahar (昼) を主語とみなしている。スナールはここの箇所を Le jour, en vérité, mahiman de devant, est né à la suit du cheval と訳している。

次いで，われわれは tasya pūrve samudre yonī という文句を検討しよう。問題は，yoni という語であろう[8]。シャンカラは yonir ity āsādana-sthānam と注釈している。Yonī とは，要するに，金と銀の容器が獲得される場所を指して言う。わたくしは，yoni を発祥の地と訳した。Tasya pūrve samudre yonī は，「それ（金杯）の発祥の地は，東海にある」と訳される。Rātrir enaṃ paścān mahimā 'nvajāya tasyāpare samudre yonir という文句は，「馬の後ろに置かれた（銀の）杯は，夜として馬の後ろに馬の後に生まれた。それ（銀杯）の発祥の地は，西海にある」と，このように訳される。シャンカラは，銀杯が夜であるという思想を二通りに解釈する。一方においては，彼は rājata (銀) とrātrī (夜) が *rā* という音素 (varṇa) で始まることに注目し，その限りで rājata と rātrī は共通していると言う。他方，彼は銀杯が金杯の後ろに置かれ，昼の後に夜が来ることを指摘し，銀杯と夜が「後に来るという点では共通しているから」と注釈している。しかるに，アーナンダギリはシャンカラの注釈に対する副注のなかで varṇa を色の意味に解釈し，夜は銀色であると言う。つまり，ここでは色の類似性が認められる。Etau vā aśvaṃ mahimānāv abhitaḥ sambabhūvatuḥ——「まことに，これら二つの杯は，馬の両面から生じたのであった」，と。Hayo bhūtvā devān avahad vājī gandharvān arvā 'surān aśvo manuṣyān samudra evāsya bandhuḥ samudra yoniḥ——「それはハヤとなって神々を運んだ。それはヴァージンとなってガンダルヴァを，アルヴァンとなってアスラ(悪神)を，アシュヴァとなって人間を運んだ。それ（馬）の血族は海である。それの発祥の地は海である」，と。Haya, vājin, arvan および aśva はすべてみな馬に対する異名である。それゆえ，わたくしは邦訳は試みなかった。

海が馬の発祥の地であるという表現は，われわれの注目に値する。タイッティリーヤ・サンヒター，II, 3, 12 およびタイッティリーヤ・ブラー

フマナ，III, 8, 4, 3 には，apsuyonir vā aśvaḥ という表現が見られる。しかし海 (samudra) は，なぜ，馬の発祥の地であろうか？ この点に関して，わたくしは「それが尿をすることは，雨が降ることである」という表現に読者の注意を喚起したい。馬が尿をすれば，多量の水が流れる。それは，いわば，海になる。このことを例証するかのように，タイッティーヤ・ブラーフマナ，II, 2, 9, 2 以下に，馬の膀胱 (vasti) が破れて海になったという記述が見いだされる。そこでは，次のように述べられている——tad vastim abhinat. sa samudro 'bhavat. tasmāt samudrasya na pibanti. prajananam iva hi manyante. このテキストの文句によれば，海は馬の生殖器官とみなされている。いずれにせよ，海が馬の膀胱が破れたものという考えは興味深い。しかし apsuyonir vā aśvaḥ という時には，単純に馬は海から発祥すると解釈することが出来るであろう。馬が海中から生じるという考えは，ブラーフマナ文献においてはそれほど奇妙ではないからである[9]。ここで，われわれは当該のテキストの訳を与えよう——

I, 1, 2 (訳)——まことに，馬の前に置かれた（金の）杯は，昼として馬の後に生まれた。それ（金杯）の発祥の地は，東海にある。馬の後ろに置かれた（銀の）杯は，夜として馬の後に生まれた。それ（銀杯）の発祥の地は，西海にある。まことに，これら二つの杯は馬の両面から生じたのであった。それはハヤとなって神々を運んだ。それはヴァージンとなってガンダルヴァを，アルヴァンとなってアスラ (悪神) を，アシュヴァとなって人間を運んだ。それ（馬）の血族は海である。それの発祥の地は海である。

I, 2, 1——naiveha kiñcanāgra āsīn mṛtyunaivedam āvṛtam āsīt | aśanāyayā 'śanāyā hi mṛtyus tan mano 'kurutātmanvī syām iti | so 'rcann acarat tasyārcata āpo 'jāyantārcate vai me kam abhūd iti tad evārkasyārkatvaṃ kaṃ ha vā asmai bhavati ya evam etad arkasyārkatvaṃ veda ||1||

Naiveha kiñcanāgra āsīt という文句は，「初めに，ここにはまったく何もなかった」と訳すことが出来る。この短い文章は，わたくしに幾つか

の事柄を示唆する。まず第一に，この文句はわたくしにタイッティリーヤ・ブラーフマナ，II, 2, 9, 1 の文句を思い出させる。そこでは，次のように述べられている——idaṃ vā agre naiva kiṃcanāsīt，と。そして，その直後に，このブラーフマナは天・空・地の三界がまだ存在しなかったと述べている。ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドにおいても，三界は最初に存在しないことが示唆されている。このウパニシャッドの当該の箇所は，初めには何一つとして個別的なものが存在しなかったことを強調している。「初めに，ここにはまったく何もなかった」という文句は，わたくしに創世記の冒頭の文句を思い出させる——「はじめに神は天と地とを創造された」！宇宙の創造には発端があった！ウパニシャッドにおいても，「初めに」(*agre*) という語が使用されている。「初めに」は，何一つ存在しなかった。しかし，三界が存在する以前に絶対無が存在したわけではない。なぜなら，飢え (aśanāyā) としての死 (*mṛtyu*) によって，世界は覆われていたからである——mṛtyunaivedam āvṛtam āsīt aśanāyayā (これは死によって，飢えによって覆われていたから)。ここでは，飢えと死は同格である——aśanāyā hi mṛtyus (なぜなら，死は飢えであるから)。

ウパニシャッド的な発想によれば，ここに存在するものは何であろうとすべて死によって捉えられ，死によって克服される。この死は，飢えと同一視される。シャンカラの注釈によれば，飢えは「食おうという欲求」である。もちろん，ここに存在するものは，一つの例外もなく，すべて死の餌食である。現代的に解釈すれば，この世における一切の事物は死によって捉えられ，死によって到達される存在である。古代的な発想で言えば，すべての事物は「食うことの出来るもの」である。三界が存在する以前には何一つ存在しなかったけれども，やがて創造されるはずの三界は死によって支配されるものとして特徴づけられている。すべての存在は死によって制約されている。つまり，すべての存在は時間によって制約されているというのが，ウパニシャッドの底流に流れている思想である。馬祀祭においては，祭祀に適した馬の頭は，まことにあかつきであり，祭祀に適した馬のアートマンは歳である。あるいはまた，馬の四肢は季節であり，馬の関節は月と半月であり，その足は，昼と夜である。このように，時間の観念は，当該の箇所において非常に重要な役割を果している。それと同じく，

この世界が死によって，あるいは同じことだが，飢えによって覆われていたという記述は，最高に示唆的である。ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドの他の箇所 (III, 1, 3) においても，死がすべてを支配し，この世の存在は，いわば，死への存在にすぎないことが雄弁に語られている——yad idaṃ sarvaṃ mṛtyunā 'ptaṃ sarvaṃ mṛtyunābhipannaṃ（このすべては死によって到達され，すべては死によって捉えられている)。

かつて，宗教学者のエリアーデ (Eliade) は次のように述べた——「西洋思想のこの最後の発見，すなわち，人間は本質的に時間的・歴史的な存在 (un être temporel et historique) であるということ，人間は歴史が作ったところの存在でしかなく，しかも，そうでしかあり得ないということ——この思想が今でもヨーロッパの哲学を支配している」[10]，と。そしてエリアーデは，インドはすべての「条件づけ」の母型としての「時間性の意識」(conscience de la temporalité) を知っていると考えた。わたくしは，ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド，I, 2, 1 の箇所に関して，古代インドの哲学においてはすべての存在は時間によって制約された存在とみなされていると考えざるを得ない。古代インドの思想は，本質的に実存主義的である。

さて，すべては死の食物であるとすれば，死は食物を創造しなければならない。死が創造者になるためには，どのような過程が必要であろうか？われわれはまず最初に tan mano 'kurutātmanvī syām iti という文句を検討しなければならない。Tad（中性形）が manas（男性形）を意味することは間違いない。しかし，mano 'kuruta については二つの解釈が可能であろう。一つの解釈はマナス（心）が「考えた」，「思いを抱いた」ということである。マクス・ミュラー，スナールはこのように解釈し，それぞれ Death (the first being) thought, Il conçut cette pensée と訳している。Mano 'kurute を「決心する」と訳すことも，この解釈に含めてよいであろう。ゲルトナー (Geldner) はこの文句を Es beschloß と訳している[11]。もう一つの解釈は，ドイッセンが試みたように Da schuf er das *Manas* と解釈することである。ベートリンクは，この箇所を Dieses eignete sich ein Denkorgan と訳している。もちろん，「マナスはみずから決心してマナスを作った」，と解釈することも不可能ではない。しかし，わたくし自身はタイッティリーヤ・ブラーフマナ，II, 2, 9, 1 の文句に

拠って，mano 'kuruta を「それ（死）は心を作った」と訳したいと思う。タイッティリーヤ・ブラーフマナにおいては，次のように述べられている——idaṃ vā agre naiva kiṃcanāsīt. na dyaur āsīt. na pṛthivī. nāntarikṣam. tad asad eva san mano 'kuruta syām iti，と。もちろん，「死が自分は存在しようと決心した」，と訳すことも可能である。しかし，タイッティリーヤ・ブラーフマナは，その要約の部分で asato 'dhi mano 'sṛjyata, manaḥ prajāpatim asṛjata. prajāpatiḥ prajā asṛjata. tad vā idaṃ manasy eva paramaṃ pratiṣṭhitam. yad idaṃ kiṃ ca····と述べている。このテキストに関する限り，マナス（心・内官）は無から流出したのであり，およそ存在するものは究極的にはマナスにのみ基礎づけられている。

Ātmanvī syām iti という文句は難解である。アートマンが何を意味するかはかならずしも明らかではないからである。死は，「わたしはアートマンをもつものにはろう」と考えてマナスを作った。シャタパタ・ブラーフマナ，X, 5, 3, 2 によれば，マナス (manas) はアートマンを望んだと言われる。しかし，アートマンが何を意味するかは明らかではない。わたくしは，saṃvatsara ātmā 'śvasya medhyasya という文句を ṛtavo 'ṅgāni という文句と対照させる必要があると思う。アートマンは，aṅga（四肢，部分的なもの）に対して身体，全体的なものを意味する。アートマンは部分をもつものと解釈することが許されるのではなかろうか？タイッティリーヤ・ブラーフマナ，I, 2, 6, には sarveṇa hy ātmanātmanvī という表現が見いだされる。ここの箇所では，ātman は avayavin と解釈することが出来る。シャンカラはここの箇所のアートマンを aham anenātmanā manasā manasvī syām ity abhiprāyaḥ と注釈している。タイッティリーヤ・ブラーフマナ，II, 2, 9, 1 には，tad asad eva san mano 'kuruta syām iti と述べられているが，ここでは心はみずから存在しようと決意したと解釈してよい。マクス・ミュラーは，ここの箇所を，Let me have a body と訳し，ドイッセンは denn er begehrte, selbsthaft (körperhaft) zu sein と訳している。スナールの訳は，Puissé-je me réaliser! となっている。ベートリンクは，アートマンを ein Selbst と訳している。わたくしは，アートマンを「身体」(śarīra) と解釈する代わりに，「身体をもっているもの」(śarīrin) と理解する。もし

もアートマンを「身体」とみなすとしても，それは身体が四肢・部分をそなえている点に着目してのことである。わたくしは，アートマンを四肢に対する胴体，部分的なものに対する全体的なものとして理解する。アートマンは，部分をもつもの・全体的なものという考えが，ここの箇所ですでにきざしている。それゆえ，死が「わたしはアートマンをもつものになろう」と考えたとすれば，その際，死は「部分をもつ存在」，あるいは「全体的なもの」として現象界に登場しようとしたに相違ない。

So 'rcann acarat tasyārcata āpo 'jāyantārcate vai me kam abhūd iti——「それ（死）は讃歌を歌いながら，さまよい歩いた。それが讃歌を歌っていた時に，水が生じた。まことに，讃歌を歌っていたわたしに喜び (ka) があった，と，それは言った」。しかし，ここでわれわれが注意しなければならないのは，語呂合わせ (Wortspiel) である。ここでは arka という語が問題になっている。Arka は arc と ka という二つのことばから組み合わされている。死はアートマンをほめたたえる歌を歌いながら，さまよい歩いていた。それが讃歌を歌った時に (arcata)，水が生じた。Ka は「喜び」を意味することばとしてここでは解釈されているが，シャンカラはそれを水として理解している——kam udakam。シャンカラは，この文章に関して次のように注釈している——「わたしが崇拝 (pūjā) をしていた時に水が生じた，と，このように死は考えた。それゆえ，この理由から馬祀祭の儀式に使用される火としてのアルカ (arka) はアルカと呼ばれる。これがアルカと呼ばれる所以である」，と。タイッティリーヤ・サンヒター，III, 3, 7, 3 には ya evaṃ veda savīryair eva chandobhir arcati yat kiṃ ca 'rcati という文句が見いだされる。ここでは arcati は「歌う」という意味である。それは，崇拝という意味には解されない。わたくしは，当該箇所では歌うという意味で arc が用いられていると思う。Kam は「喜び」と訳して差支えない。タイッティリーヤ・サンヒター，V, 3, 7, 1 には yasyaitā upadhīyante nāsmā akaṃ bhavati という文句が見いだされる。A-kam はここでは不幸，不運などと訳されるが，kam はそれと反対の意味をもっている。*Nirukta* (I, 14) は，kam iti sukhanāma と述べている。

Tad evārkasyārkatvaṃ kaṃ ha vā asmai bhavati ya evam etad arkasyārkatvaṃ veda——これが，アルカのアルカと呼ばれる所以であ

る。アルカのアルカと呼ばれる所以をこのように知る人には，まことに喜びがある。ウパニシャッドにおいては，*ya evaṃ veda* という定式はよく用いられる。「このように知っている人」には願望成就が約束されるという思想はウパニシャッドの根本特徴の一つである[12]。しかし，ここの箇所でもまた，われわれは「ことばの遊び」に注意しなければならない。アルカがアルカと名づけられていることを認識する人には喜びがあるというのは，どういうことであろうか？この点に関して，シャンカラは「カ (ka) あるいは水 (udaka) という二語は名前が共通であるから」，と注釈している。

I, 2, 1 (訳)——初めに，ここにはまったく何もなかった。これは，死によって覆われていた，飢えによって。なぜなら，死は飢えであるから。それ (死) は，「わたしは身体をもつものになろう」と考えて，心を作った。それは讃歌を歌いながら，さまよい歩いていた。それが讃歌を歌っていた時に，水が生じた。「まことに，讃歌を歌っていたわたしには喜びがあった」と，それは言った。これが，アルカのアルカと呼ばれる所以である。このアルカのアルカと呼ばれる所以をこのように知っている人には，まことの喜びがある。

I, 2, 2——āpo vā arkas tad yad apāṃ śara āsīt tat samahanyata | sā pṛthivy abhavat tasyām aśrāmyat tasya śrāntasya taptasya tejoraso niravartatāgniḥ ||2||

Āpo vā arkas——「アルカは，まことに水である」。シャンカラの注釈によれば，崇拝を行なうための補助手段である水がアルカにほかならない。アルカは火の原因であるから。そして，火は水中にその拠り所をもっている。水は，直接，アルカであるのではない。水はここで話題になっていないからである。Tad yad apāṃ śara āsīt tat samahanyata sa pṛthivy abhavat——「水の精粋であったものが凝結して，大地になった」。言語的には，たった今挙げた文章には問題はない。ここでわれわれの興味をそそるのは，水の精粋が固まって大地になったという思想である[13]。シャンカラは，「水から宇宙卵 (aṇḍa) が現われた」と解釈している。さて，われわれはタイッティリーヤ・ブラーフマナ，II, 2, 9, 2 において，馬の膀

胱が破れて海になったという文句に触れた。このブラーフマナにおいては引き続き，「これ（全世界）は，まことに水であった，満潮であった」と，述べられている。水中に落ちたプラジャーパティの涙が大地になり（yad apsv avādyata. sā pṛthivy abhavat），彼のふき取った涙が空になり，彼が上の方へふき取った涙が天になったと言われる（タイッティリーヤ・ブラーフマナ，II, 2, 9, 4）。われわれのウパニシャッドにおいては，水の精粋が凝結して大地になったと述べられているだけであり，空と天についてはまったく触れられていない[14]。われわれは，水の精粋が大地になったことを知るだけである。

Tasyām aśrāmyat tasya śrāntasya taptasya tejoraso niravartatāgniḥ——「大地の上でそれ（死）は疲労した。それが疲労して熱した時に，熱の精は火になった」。Śram という語は，「努力して，その結果疲労する」という意味である。問題は tejorasa という語の意味である。Tejoraso niravartatāgniḥ という文句を，ベートリンクは ward die Glut und der Saft zu Feuer，ドイッセンは ward seine Kraft, sein Saft zu Feuer と訳している。マクス・ミュラーは，ここの箇所を Agni (Virāg) proceeded, full of light と訳した。これら諸大家の訳は，シャンカラの注釈に基づいている。シャンカラは tejorasa を teja eva rasas（熱は精にほかならない）と解釈しているからである。しかし，tejorasa は熱の精（tejaḥsāra）と解釈すべきである。熱の精である火が現われる，という風にわたくしは考える。シャーンーカーヤナ・ブラーフマナ，VI, 10 には次のような文句が見いだされる——athaitasyā eva trayyai vidyāyai tejorasaṃ prābṛhat. この火は何であろうか？この点について，シャンカラは次のように答える——「それは宇宙卵の内部にある Virāj，プラジャーパティ（生類の主）である。それは最初に生まれるものとして，身体と器官の集合体をもつものとして生まれた。『まことに，それは最初に身体をもつ存在である』（シヴァ・プラーナ，V, 1, 8, 22）と伝承に述べられているからである」，と。

以上のことを考慮しながら，わたくしはこの箇所をまとめて訳して置こう——

I, 2, 2（訳）——アルカは，まことに水である。そこで，水の精粋であったものが凝結して，大地になった。大地の上で，それ（死）は疲労した。

それが疲労して熱した時，熱の精は火になった。

I, 2, 3——sa tredhā 'tmānaṃ vyakurutādityaṃ tṛtīyaṃ vāyuṃ tṛtīyaṃ sa eṣa prāṇas tredhā vihitaḥ | tasya prācī dik śiro 'sau cāsau cermau | athāsya pratīcī dik puccham asau cāsau ca sakthyau dakṣiṇā codīcī ca pārśve dyauḥ pṛṣṭham antarikṣam udaram iyam uraḥ sa eṣo 'psu pratiṣṭhito yatra kvacaiti tad eva pratitiṣṭhaty evaṃ vidvān ||3||

まず最初に，sa tredhā 'tmānaṃ vyakurutādityaṃ tṛtīyaṃ vāyuṃ tṛtīyaṃ sa eṣa prāṇas という文句を検討しよう。熱の精としての火が ātman，すなわち，自己自身（＝火）を三重に分割したと解釈してよいであろう。シャタパタ・ブラーフマナ，VI, 7, 4, 4 の記述によれば，火 (agni) には三重の形態における三つ，すなわち，アグニ (agni)，ヴァーユ (vāyu)，およびアーディティヤ (āditya) が存在することが知られている。そして，火の淵源は水であると言われる。「まことに，水中からこれ（火）は最初に生まれた」(adbhyo vā 'eṣa prathamam ājagāma) のである。太陽は火と風との関連において「三分の一」である。風は火と太陽との関連において「三分の一」である。Sa tredhā 'tmānaṃ vyakurutādityaṃ tṛtīyaṃ vāyuṃ tṛtīyaṃ——「それ（輝くもの・火）は自己自身を三重に，すなわち，（三分の一は火に）三分の一は太陽に，三分の一は風に分割した」。火，太陽および風は三界として火の三つの形態である。シャンカラは sa eṣa prāṇas tredhā vihitaḥ というテキストについて，「この息[15]はすべての存在のアートマンではあるけれども，火，風および太陽の形態として，みずから自身，特に死のアートマンとして三重に分割された。しかし，輝くという自己の性質を失うことなくそれは分割された」と述べ，「馬の場合のように馬祀祭に使用される，最初に生まれたものとしてのアグニ（火）・アルカ，輝く火壇の構築をその本質とするものについての観察であると言われる」と注釈している。いずれにせよ，ここで息 (prāṇa) と呼ばれるものがアルカとしての火を意味することは否定することが出来まい。ここでもまた，われわれは火とほかのものが関係づけられていることを知るであろう。

まず，tasya prācī dik śiro cāsau cermau という文句を検討しよう。この文章の意味は明白である——「それ（火）の頭は，東の方角である。それの両腕は，これとあれである。シャンカラによれば，火壇の頭と東の方角とは「他から区別される，すなわち，優れているという点で共通であるから」である。同様に，シャンカラは「それの両腕は，これとあれである」という文句について，両腕は「北東と南東である」と解釈している。Athāsya pratīcī dik puccham asau cāsau ca sakthyau dakṣiṇā codīcī pārśve——「次いで，それの尾は西の方角である。それの両腿は，これとあれである。それの両脇腹は，南と北である」。注釈者によれば，「それの尾は西の方角である」というのは，「それが東を向いている時には，尾は西の方角と関係をもつから」である。それの両腿は北西と南西である。両腿は「背と角（koṇa）を形成している点で共通しているから」である。「それの両脇腹は，南と北である」というのは，両脇腹が南北の「両方角と関係している点で共通であるから」である。

Dyauḥ pṛṣṭham antarikśam udaram iyam uraḥ という文章の意味は明白である——「それの背は天である。それれの腹は空である。それの胸は，これ（大地）である」。「それの背は天である。それの腹は空である」という文句は，われわれのウパニシャッド，I, 1, 1 に現われたのとまったく同じである。I, 1, 1 においては pṛthivī pājasyaṃ となっているのに対し，ここの箇所では iyam uraḥ となっている。Iyam が大地を意味することは言うまでもない。「彼の胸はこれ（大地）である」という文句には特に問題はない。注釈者は胸と大地が「下の部分である点において共通しているから」と述べ，両者の間の共通性を指摘する。しかし，胸は大地のように下部とは言えない。Pṛthivī pājasyaṃ を「足の裏は大地であると訳せば，「下の部分である点において共通している」と言うことが出来るであろう[16]。Sa eṣo 'psu pratiṣṭhito yatra kvaiti tad eva pratitiṣṭhaty evaṃ vidvān——「このもの（火）は，水中に拠り所をもっている。このように知っている人は，たとい何処へ行こうと，至るところに拠り所をもっている」。シャンカラは tad eva を tatraiva と注釈している。そして，彼は evam ime lokā apsv antaḥ という聖典の文句を引用している。シャンカラが引用した文句は，シャタパタ・ブラーフマナ，X, 5, 4, 3 に見いだされる。火が水中に拠り所をもち，水によって基礎づけられている

という思想がその根底に横たわっている——

I, 2, 3 (訳)——それは自己自身を三重に，すなわち，(三分の一は火に) 三分の一は太陽に，三分の一は風に分割した。これが，三重に分けられた息である。それ（火）の頭は，東の方角である。それの両腕は，これ（北東）とあれ（南東）である。次いで，それの尾は西の方角である。それの両腿は，これ（北西）とあれ（南西）である。それの両脇腹は，南と北である。それの背は天である。それの腹は空である。それの胸は，これ（大地）である。このものは，水中に拠り所をもっている。このように知っている人は，たとい何処へ行こうと，至るところに拠り所をもっている。

I, 2, 4——So 'kāmayata dvitīyo ma ātmā jāyeteti sa manasā vācaṃ mithunaṃ samabhavad aśanāyā mṛtyus tad yad reta āsīt sa saṃvatsaro 'bhavat | na ha purā tataḥ saṃvatsara āsa tam etāvantaṃ kālam abibhaḥ | yāvān saṃvatsaras tam etāvataḥ kālasya parastād asṛjata | taṃ jātam abhivyādadāt sa bhāṇ akarot saiva vāg abhavat ||4||

ここの箇所の冒頭の文句——so 'kāmayata dvitīyo ma ātmā jāyeteti——は，「プラジャーパティは欲した，わたしは多となろう，わたしは繁殖しよう」という，ブラーフマナ文献にしばしば見られる定式をわれわれに思い出させる。マイトラーヤニー・サンヒター (Maitrāyaṇī-Saṃhitā), IV, 2, 1 には prajāpatir vā eka āsīt so 'kāmayata bahuḥ syāṃ prajāyeyeti. sa manasātmānam adhyāyat という表現が見られる。ここでは，心 (manas) とアートマン (ātman) は一対として考察される。マナスと一対になっているアートマンとは，何であろうか？ジャイミニーヤ・ブラーフマナ (Jaiminīya-Brāhmaṇa), II, 244 によれば，次のように述べられている——prajāpatir vā idam agra āsīn nānyaṃ dvitīyaṃ paśyamānas tasya vāg eva svam āsīd vāg dvitīyā sa aikṣata hantemāṃ vācaṃ visṛje.「ことば」(vāc) は第二のもの，自己 (sva) にほかならない。「ことば」は「第二のアートマン」として「第一のアートマン」とし

ての心（マナス）と一対になり，両者は性的に交わる。カータカ・サンヒター (Kāṭhaka-Saṃhitā), XII, 5 には次のように述べられている——prajāpatir vā idam āsīt tasya vāg dvitīyāsīt. tāṃ mithunaṃ samabhavat sā garbham adhatta, と。シャンカラは「第二のアートマン」を身体 (śarīra) と理解しているけれども，わたくしはブラーフマナ文献の文脈から判断して，「第二のアートマン」は「ことば」(vāc) を意味するものと解釈する。それゆえ，ここの箇所をわたくしは「わたしに第二のアートマン（自己自身）が生まれるように，と彼は欲した」と訳したいと思う。この文句は，次の文章によって例証される——「飢えとしての死は，心によってことばと性的な交わりを結んだ[17]。精液であったものは，歳になった」(sa manasā vācaṃ mithunaṃ samabhavad aśanāyā mṛtyus tad yad reta āsīt sa saṃvatsaro 'bhavat)。

わたくしがここで注意したいと思うことは，この最初期のウパニシャッドにおいて時 (kāla) の観念がすでに見られるということである。飢えとしての死が世界の創造者であるということは，世界そのものの構造が死によって決定的に制約されているということである。そして，死によって制約あれている存在は，例外なくすべて時の激流のなかに流され，絶えず変化しているということである。プラジャーパティは死であり，歳であり，時間である。ジャイミニーヤ・ブラーフマナ (I, 246) は，すべての存在を呑み込むものとしての死の存在を強調する——yad dha vai kiṃ cedam asmin loka ātmanvat tad dha sarvaṃ mṛtyur evābhivyādāya tiṣṭhati. sa yo ha sa mṛtyus saṃvatsara eva saḥ. tasya hartava eva mukhāni (まことに，この世においてアートマンをもっているものは何であろうと，そのすべてを呑み込もうとして，死はそこに立っている。死であるものは，歳にほかならない。季節は，それの口にほかならない)。現代的に言えば，「死であるものは，歳にほかならない」という文句は，「すべてのものは死によって捉えられる時間内存在にすぎない」というように置き換えることが出来るであろう。心とことばの性的な交わりの際に生じた精液 (retas) が歳になった，とわれわれのテキストは言う。そして，精液であったものが歳になる以前には歳はなかった，とも言われる——na ha purā tataḥ saṃvatsara āsa (それ以前には，歳は存在しなかった)。

Tam etāvantaṃ kālam abibhaḥ. yāvān saṃvatsaras tam etāvataḥ

kālasya parastād asṛjata——「それ（死）はそれをこれだけの時間，すなわち，一年間だけ保持した。これだけの時間が過ぎた後に，それを流出した」。精液であったものが死の胎内に一年間だけ保持された後で，それは歳を sṛj したというわけだ。Sṛj という語は，創造するという意味に使用される。しかし，sṛj はユダヤ教やキリスト教において説かれる「創造」とは根本的に異なる。それは，決して無からの創造ではない。それはあるものの真の性質・自性のなかから生み出される行為を意味する。しかも，そのなかから生み出されるのはカスではなく精粋（rasa）である。すくなくとも，ここの箇所では sṛj はこのように解釈することが出来る。流出するものと流出されるものは本質が同一であるから，死と歳とは同一の存在と言うことになる。つまり，死の精液が歳になったと言ってよい。

Taṃ jātam abhivyādadāt sa bhāṇ akarot saiva vāg abhavat——「それが生まれるや否や，死はそれを呑み込もうとして，口を開け放った。それはバーン（bhāṇ）という音を立てた。それが，ことばになった」。われわれは，この箇所で言語の起源に関する一学説，すなわち，*Interjectional theory* の芽萌を認めることが出来る。バーンと呼ぶというのは，擬声音の一種とみなすことが出来る。死は飢えているので，みずからのなかから流出した子供を食おうとしたという思想がここで展開されている。われわれは，ここの箇所をまとめて訳そう——

I, 2, 4（訳）——わたしに第二のアートマン（自己自身）が生まれるように，とそれ（死）は欲した。飢えとしての死は，心によってことばと性的な交わりを結んだ。精液であったものは，歳になった。それ以前には，歳は存在しなかった。それ（死）はこれだけの時間，すなわち，一年間だけ，それを保持した。これだけの時間が過ぎた後に，それ（死）はそれを（みずからのなかから）流出した。それが生まれるや否や，死はそれを呑み込もうとして，口を開け放った。それは，バーンと叫んだ。それが，ことばになった。

I, 2, 5——sa aikṣata yadi vā iyam abhimaṃsye kanīyo 'nnaṃ kariṣya iti sa tayā vācā tenātmanedaṃ sarvam asṛjata yad idaṃ kiñcarco yajūṃṣi sāmāni chandāṃsi yajñān prajāḥ paśūn | sa yad

yad evāsṛjata tat tad attum adhriyata sarvaṃ vā attīti tad aditer adititvaṃ sarvasyaitasyāttā bhavati sarvam asyānnaṃ bhavati ya evam etad aditer adititvaṃ veda ‖5‖

さて，sa aikṣata という文句は，「それ（死）は考えた」と訳すことが出来る。死が考えたことは，次のことである——yadi vā iyam abhimaṃsye kanīyo 'nnaṃ kariṣya iti（まことに，もしもわたしがこれを傷つければ，食物はより少なくなるであろう）。シャタパタ・ブラーフマナ，X, 4, 3—9 においては，死と神々の興味深い対話が記録されている。死は神々に対して，人間がもしも不死になれば自分は食物がなくなると不平をもらす。そこで，神々は人間が彼らの身体を死に引き渡した後で不死になるように定めた。しかし，この条件を拒絶する人間は死後再生し，再三再四，死の食物（anna）にならねばならない——このエピソードを踏まえた上で，われわれは上の文章を理解しよう。いずれにせよ，死はみずからのなかから流出したものの殺害を思い止まった。死は，すでに述べたように，自己の心とことばの性的な営みを通じて世界をみずからのなかから流出する。シャンカラは，retas（種子）を食べればわずかの食物しか得られないと考えている。種子を食べてしまえば，穀物が存在しないようなものである。そこで，死は心とことばの性交によって，およそ存在するものをすべて流出したということになる。シャンカラは，tenātmanā を manasā と注釈している。ここの箇所のアートマンがマナス（心）を意味することは明らかである。Sa tayā vācā tenātmanedaṃ sarvam asṛjata yad idaṃ kiñcarco yajūṃṣi sāmāni cchandāṃsi yajñān prajāḥ paśūn——「それ（死）は，そのことばとそのアートマンによって，およそここに存在するこのすべて，すなわち，リチュ（リグ・ウェーダの讃歌），ヤジュス（ヤジュル・ヴェーダの祭詞），サーマン（サーマ・ヴェダの旋律），韻律，祭祀，人間および動物を流出した」。

死がすべてのものを「食う」という表現は，Aditi（ヴェーダの神格。無限なる存在を意味する）との関連において理解される。ここでは，ad と Aditi の Wortspiel が存在することが知られる。Sa yad yad evāsṛjata tad tad attum adhriyata sarvaṃ vā attīti tad aditer adititvaṃ sarvasyaitasyāttā bhavati sarvam asyānnaṃ bhavati ya evam etad aditer

adititvaṃ veda——「それは，（みずからのなかから）流出したものは何であろうと，すべてを食い始めた。まことに，それはすべてを食うゆえ，それがアディティ（Aditi）のアディティ（Aditi）と呼ばれる所以である。このように，このアディティのアディティと呼ばれる所以を知っている人はこのすべてを食う人となり，すべてはその人の食物になる」。死は全世界を食うものであり，全世界は死の食物である。わたくしがここで特に注目に値すると考えるのは，sa yad yad evāsṛjata tad tad attum adhriyate という表現である。わたくしはこの表現と関連してシャタパタ・ブラーフマナ，X, 4, 3, 1 の次の文句を引用する——eṣa vai mṛtyur yat saṃvatsaraḥ. eṣa hi martyānām ahorātrābhyām āyuḥ kṣiṇoty atha mriyante tasmād eṣa eva mṛtyuḥ（歳であるものは，まことに，この死である。なぜなら，それは昼夜の二つによって死すべものの生命を滅ぼすから。そこで，彼らは死ぬ。それゆえ，これは死にほかならない）。昼の次に夜が訪れ，このようにして時は流れる。昼夜によって，人の生命はやがて尽きる。われわれのウパニシャッドは，人間の生命が時の流れによって容赦なく傷つけられ，やがて死のために尽きることを，すべては「死の食物」であるというふうに表現している——

I, 2, 5（訳）——それ（死）は考えた，「まことに，もしもわたしがこれを傷つければ，わたしは食物をより少なくするであろう」，と。それは，そのことばとそのアートマンによって，およそここに存在するすべてのもの，すなわち，リチュ（リグ・ヴェーダの讃歌），ヤジュス（ヤジュル・ヴェーダの祭詞），サーマン（サーマ・ヴェーダの旋律），韻律，祭祀，人間，および動物を流出した。それ（死）は，（みずからのなかから）流出したものは何であろうと，すべてを食い始めた。まことに，それはすべてを食う（ad）ゆえ，それがアディティ（Aditi）のアディティ（Aditi）と呼ばれる所以である。このように，アディティのアディティと呼ばれる所以を知る人はこのすべてを食う人となり，すべてはその人の食物になる。

I, 2, 6——so 'kāmayata bhūyasā yajñena bhūyo yajeyeti | so 'śrāmyat sa tapo 'tapyata tasya śrāntasya taptasya yaśo vīryam udakrāmat | prāṇā vai yaśo vīryaṃ tat prāṇeṣūtkrānteṣu śarīraṃ

śvayitum adhriyata tasya śarīra eva mana āsīt ‖6‖

So 'kāmayata bhūyasā yajñena bhūyo yajeyeti という文句の検討から始めよう。Bhūyasā yajñena は,「大きな祭祀によって」,「大規模な祭祀によって」と訳すことが出来る。問題は,その次に来る bhūyas (bhūyo) である。シャンカラは bhūyaḥ punar api と注釈している。マクス・ミュラーは,この注釈に基づいて bhūyas を again と訳し,ドイッセンは noch weiter と訳している。しかるに,ベートリンクは bhūyasā yajñena との関連を重視して bhūyas を in grossem Maasstabe と訳している。スナールの訳 grandement も,ベートリンクのそれに近いと言えるであろう。わたくし自身はベートリンクの訳を踏襲した。それゆえ,わたくしは so 'kāmayata bhūyasā yajñena bhūyo yajeyeti を,「それは欲した,わたしは大規模な祭祀によってより大規模に祭りを行ないたい」,と訳したのである[18]。

So 'śrāmyat sa tapo 'tapyata——「それは疲労して,熱くなった」。すでに見たように,śram という語には「努力する」という意味がある。努力した後で疲労するというのが,śram の原義である。例えば,タイッティリーヤ・サンヒター,VII, 1, 5, 1 には tasyām aśrāmyat prajāpatiḥ, sa devān asṛjata vasūn rudrān ādityān という文をが見られる[19]。この場合,aśrāmyat は「努力をした」,「骨を折った」という意味で使用されている。同様に,tap もまた sṛj するのである。タイッティリーヤ・サンヒター,III, 1, 1, 1 には prajāpatir akāmayata, prajā sṛjeyeti sa tapo 'tapyata sa sarpān asṛjata と述べられている。しかし,シャタパタ・ブラーフマナ,II, 5, 1, 1 には次のような記述がある——prajāpatir vā idam agra eka evāsa. sa aikṣata—kathaṃ nu prajāyeyeti. *so 'śrāmyat sa tapo 'tapyata* sa prajā asṛjata。骨を折って疲労したので,死は生類を生じさせる原因である tapas を行なったのである。

Tasya śrāntasya taptasya yaśo vīryam udakrāmat——「それ(死)が疲労して熱くなった時,栄光と力が(そのなかから)出て行った」。Prāṇā vai yaśo vīryaṃ——「まことに,栄光と力とは生気である」。ここで問題になるのは,prāṇāḥ である。シャンカラはこれを cakṣurādayo と注釈している。つまり,彼によれば,prāṇāḥ は眼などの感覚器官を指すとい

うわけである。Prāṇāḥ は prāṇa の複数形であり，生気と訳すことも可能である。ベートリンクはこれを die Hauche，スナールは les souffles (la vie) と訳している。Tat prāṇesūtkrānteṣu śarīraṃ śvayitum adhriyata tasya śarīra eva mana āsīt——「生気が出て行った時，その身体はふくれ始めた。しかし，彼の身体には心が存在していた」。「栄光と力とは生気である」というのは，どういう意味であろうか？シャンカラによれば，感覚器官は栄光である。感覚器官は栄光の原因であるからである。なぜなら，それらの感覚器官が存在している時に名声が存在するから。この身体のなかの力も同様である。なぜなら，その人の感覚器官が出て行けば，彼は栄光もなく，力もないからである。それゆえ，感覚器官はこの身体における栄光であり，力である。それゆえ，このように器官によって特徴づけられた栄光と力は出て行った。それゆえ，このように栄光と力である器官が身体から出て行った時に，プラジャーパティの身体はふくれ始めて祭祀に適しなくなった。しかし，プラジャーパティは身体から出ていったけれども，それの身体のなかには心が存在していた。それはちょうど誰がある人の好きな物が遠くへ行っても，その人の心がその上にあるようなものである——シャンカラは，以上のように注釈している。彼の注釈を踏まえ，われわれは当該の箇所を次のように訳そう——

I, 2, 6 (**訳**)——それ（死）は欲した，「わたしはより大規模な祭祀によってより大規模に祭祀を行なおう」，と。それは疲労して熱くなった。それが疲労して熱くなった時，栄光と力が出て行った。栄光と力とは，まことに生気である。生気が出て行った時，その身体はふくれ始めた。しかし，それの身体には心が存在していた。

I, 2, 7——so 'kāmayata medhyaṃ ma idaṃ syād ātmanvy anena syām iti | tato 'śvaḥ samabhavad yad aśvat tan medhyam abhūd iti tad evāśvamedhasyāśvamedhatvam | eṣa ha vā aśvamedhaṃ veda ya enam evaṃ veda | tam anavarudhyaivāmāmanyat | taṃ saṃvatsarasya parastād ātmana ālabhata | paśūn devatābhyaḥ pratyauhat | tasmāt sarvadevatyaṃ prokṣitaṃ prājāpatyam ālabhanta eṣa ha vā aśvamedho ya eśa tapati tasya saṃvatsara ātmā 'yam

agnir arkasyeme lokā ātmānas ātmānas tāv etāv arkāśvamedhau | so punar ekaikaiva devatā bhavati mṛtyor evāpa punarmṛtyuṃ jayati nainaṃ mṛtyur āpnoti mṛtyur asyātmā bhavaty etāsāṃ devatānām eko bhavati ‖7‖

われわれはまず最初に so 'kāmayata medhyaṃ ma idaṃ syād ātmanvy anena syām iti という文句を考察しよう。この文句の意味は，次の通りである——「それは欲した，わたしのこれ（身体）は祭祀に適したものになろう。わたしは，これによってアートマンをもつものになろう」。われわれが考察しなければならないのは，馬祀祭（Aśvamedha）である。タイッティリーヤ・ブラーフマナ，III, 9, 7, 1 には apa vā etasmāc chrī rāṣṭraṃ krāmati. yo 'śvamedhena yajate という文句が見いだされる。さらにまた，同じブラーフマナの III, 9, 6, 1 には apa vā etasmāt prāṇāḥ krāmanti. yo 'śvamedhena yajate という文句が存在する。しかし，われわれのウパニシャッドは栄光と力としての生気がプラジャーパティ（馬）の身体から出て行かないことを望むのである。死であるプラジャーパティは，自己の身体が祭祀に適したものになることを欲した。祭祀に適した身体によって，死はアートマンをもつことを希望したのである。注釈者によれば，この身体によってアートマンをもつものになるというのは，そうすることによって身体をもつものになるという意味である。シャンカラは次のような注釈を施している——ātmanvy ātmavāṃś cānena śarīreṇa śarīravān syām iti praviveśa。

われわれのウパニシャッドは，馬祭祀の由来を次のように説明している——tato 'śvaḥ samabhavad yad aśvat tan medhyam abhūd iti tad evāśvamedhasyāśvamedhatvam。この文句は，次のように訳される——「それから，それ（身体）は馬（*aśva*）になった。それはふくれた（*aśvat*）ので，馬祀祭に適したもの（*medhya*）になった。それが，馬祀祭（Aśvamedha）の馬祭祀と呼ばれる所以である」。注釈によれば，プラジャーパティが身体を去った時には，その身体はふくれ上って馬祀祭に適しないものになる。栄光と力がそこから出て行くからである。しかし，馬という名のプラジャーパティがふたたびその身体に入れば，栄光と力は去ってしまったけれども，その身体は祭祀に適したものになったと言われる。これが，

馬祀祭の馬祀祭と呼ばれる所以である。

Eṣa ha vā aśvamedhaṃ veda ya enam evaṃ veda——「これをこのように知っている人，この人はまことに馬祀祭を知っている」。ここの文章には特に問題はない[20]。われわれは，次の文章の検討へ移ろう。Tam anavarudhyaivāmanyata. taṃ saṃvatsarasya parastād ātmana ālabhata——「馬を囲い込まずに，それ（死）はそれのことを考えた。一年後に，それは自己自身のためにそれを屠殺した」。Anavarudhya は「囲い込まずに」という意味である。シャンカラは，この語について avarodham akṛtvaiva muktapragraham と注釈している。馬を囲いに入れず手綱をはずす（馬を拘束しない）という意味である。馬祀祭においては馬は一年間自由にさまようことを許され，馬を保護するために武装した人々が雇われる。Taṃ saṃvatsarasya parastād ātmana ālabhata——「一年後に，それは自己自身のためにそれを屠殺した」。もちろん，*ālabh* は犠牲として捧げることを意味する。ベートリンクはこの箇所を Nach Verlauf eines Jahres opferte es dasselbe für sich と訳している。しかし，すでにスナールも指摘しているように，ここでもまたわれわれは Wortspiel を認めることが出来る。馬祀祭においては，馬は一年間自由に放牧される。馬は繋がれることはない。つまり，馬は捕えられない (an-avarudh)。しかし，一年後には人はそれを捕える (labh)。Ā-labh の基本的な意味は，「捕える」ということである。次いで，動物を犠牲として捧げるという意味が，それから派生した。しかし，犠牲として捧げるということは，それを屠殺するということと同じである。それゆえ，わたくしは ālabh を「屠殺する」と訳した。Ātmana という語を，シャンカラは ātmārtham（自己のために）と注釈している。わたくしは，この注釈に従った。Paśūn devatābhyaḥ pratyauhat. tasmāt sarvadevatyaṃ prokṣitaṃ prājāpatyam ālabhata——「それは，（馬祀祭で屠殺される，それ以外の）犠牲獣を神々に引き渡した。それゆえ，人はプラジャーパティ（生類の主）に属するものとして，一切神に捧げられたものを屠殺する」。わたくしがここで「犠牲獣」と訳した原語は paśu である。シャンカラに従って，わたくしはこれを grāmyāraṇyapaśu と解釈した。

さて，われわれはここで eṣa ha vā aśvamedho ya eśa tapati という文句を検討しなければならない。わたくしは，この文句と関連してジャイ

ミニーヤ・ブラーフマナ，I, 314 の文句——sa eṣa vāgniṣṭomo ya eṣa tapati——を思い出す。シャタパタ・ブラーフマナ，II, 3, 3, 7 には tad vā eṣa eva mṛtyuḥ—ya eṣa tapati. tad yad eṣa eva mṛtyuḥ—tasmād ya etasmād avācyaḥ prajās tā mriyate と述べられている。Ya eṣa tapati と tad vā eṣa eva mṛtyuḥ とは，同一の思想の流れに属する文章である。もちろん，ya eṣa tapati という文章の主語は，「太陽」である。シャンカラはこの文句について，次のよううに注釈している——ya eṣa savitā tapati jagad avabhāsati tejasā. eṣa ha vā aśvamedho ya eṣa tapati は，「ここで燃えるもの（太陽）は，まことに馬祀祭である」と訳すことが出来よう。

Tasya saṃvatsara ātmā 'yam agnir arkas tasyeme lokā ātmānas tāv etāv arkāśvamedhau——「それの身体は歳である。ここの火は，アルカ (arka) である。そのもろもろの身体は，これらの世界である。これらの二つは，祭火 (arka) と馬祀祭である」。Tasya saṃvatsara ātmā をスナールは il se réalise dans l'année と訳した。この箇所に関しては，わたくしはランガラーマーヌジャ (Raṅgarāmānuja) の注釈が正しいと思う。彼によれば，歳などの時間の車輪を回転させる太陽が歳の本質（アートマン）として認められる。馬祀祭は歳をその身体（すなわち，全体的なもの・もっとも重要なもの）としている——このように解釈されるべきであろう。Ayam agnir arkaḥ という文句は，われわれにアイタレーヤ・アーラニヤカ (Aitareya-Āraṇyaka), I, 4, 1 の文句を思い出させる。そこでは，agnir vā arkaḥ という文句が見いだされる。シャンカラは，ayaṃ pārthivo 'gnir arkaḥ sādhanabhūtaḥ と注釈している。Tasyeme lokā ātmānas という文句のなかで特に注目に値するのは，アートマンの複数形 ātmānaḥ という形がここで使用されていることである。ウパニシャッドにおいては，アートマンは単数形で用いられる場合が圧倒的であり，複数形の使用はまことに珍らしい。シャンカラによれば，ātmānaḥ はこのアルカに対する śarīrāvayavāḥ として，天・空・地の三界を意味すると解釈される。つまり，天・空・地の三界は馬祀祭において点火されるアルカの三つの身体的な部分である。Tāv etāv arkāśvamedhau——「これらの二つは，祭火と馬祀祭である」。火 (agni) は祭火 (arka) であり，太陽 (āditya) は馬祀祭である——このように言うことが出来る。

さて，われわれの言語的検討も，今や，終わりに近づいた。われわのウパニシャッドの最後の箇所について，わたくしは考察をめぐらそう。So punar ekaiva devatā bhavati mṛtyur evāpa punar mṛtyuṃ jayati nainaṃ mṛtyur āpnoti mṛtyus tasyātmā bhavaty etāsāṃ devatānām eko bhavati——「さらに，それはただ一つの神格，死にほかならない。(このように知っている人は) 再死を避ける[21]。この人には，死は到達しない。死はその人の自己になる。彼は，これらの神格の一つになる」。ここでは，死の哲学が説かれている。その思想はかならずしも明確ではないけれども，最高に示唆的であるように思われる。「再死」(punarmṛtyu) を避けるのが人生最高の理想であるという思想は，ブラーフマナ的思想の名残りである。ジャイミニーヤ・ブラーフマナ，I, 6 には etau punarmṛtyū atimucyate yad ahorātre という形が見られる。再死を避けるということは，ブラーフマナではもっとも重視される。死が到達しない状態は，ブラーフマナの理想であるだけでなく，ウパニシャッドの理想でもある。シャンカラは再死について次のように注釈している——しかし，「わたしは死にほかならない，わたしは馬祀祭である，わたしはわたしの形態としての馬・火という手段によって達成されるべき唯一の神格である，とこのように馬祀祭，死，唯一の神格を知っている人は，再死を避ける。彼は，一度死んだ後でふたたび死ぬために生まれない，という意味である。たとい死が避けられても，それは彼にふたたび到達するのではないかと疑われるならば，彼には死は到達しないと言われる」。しかし，nainaṃ mṛtyur āpnoti (彼に死は到達しない) ということは，彼が不死 (amṛta) になることでは決してない。シャタパタ・ブラーフマナ，II, 2, 2, 14 によれば，人間の場合には不死の希望 (*amṛtatvasyāśā*) は存在しないからである。人間は寿命を全うするだけである。ターンディヤ・マハー・ブラーフマナ (*Tāḍṇya-Mahā-Brāhmaṇa*)，XXII, 12, 2 によれば，「彼が寿命を全うして，より富むこと——これが確かに人間にとって不死性である (etad vāva manuṣyāmṛtatvaṃ yat sarvam āyur eti vasīyān bhavati)」。

「死はその人の自己になる」(mṛtyur asyātmā bhavati) という文句を，シャンカラは mṛtyur asyaivaṃvida ātmā bhavati と解釈している。シャタパタ・ブラーフマナ，X, 6, 5, 8 は，mṛtyur asyātmā bhavaty etāsāṃ devatānām eko bhavati の直後に，ya evaṃ veda という文句

を付け加えている。「死はその人の自己になる」という文句は，シャタパタ・ブラーフマナ，X, 5, 2, 23 にも見いだすことが出来る。シャタパタ・ブラーフマナにおいては次のように述べられている——sa eṣa eva mṛtyuḥ—ya eṣa etasmin maṇḍale puruṣo yaś cāyaṃ dakṣiṇe 'kṣan puruṣaḥ sa eṣa evaṃvida ātmā bhavati. sa yadaivaṃvid asmāl lokāt praiti. athaitam evātmānam abhisambhavati. so 'mṛto bhavati mṛtyur hy asyātmā bhavati（この円板のなかの人間，および右眼裡のこの人間は死にほかならない。それは，このように知っている人の自己になる。このように知っている人がこの世を去る時には，彼はこの自己に変えられて不死になる。なぜなら，死は彼の自己であるから）。われわれのウパニシャッドにおいては，死は人間のアートマンとみなされる。死は人間にとって本質的であり，死こそ人間存在の中心にあるものである。別のことばで言えば，人間は死ぬ存在である。たとい不死が可能だとしても，それは寿命を全うすることであって，人間には不死の希望は存在しない。人間は百の生命（百歳）をもっているだけである（タイッティリーヤ・ブラーフマナ，II, 3, 2, 1）。人間は死なねばならない。しかし，死は人間存在の外部から到達するものではなく，人間存在を決定する究極的なものである。それは，人間の内部にある。人間は死によって制約されている存在である。われわれのウパニシャッドは，「死はその人のアートマンになる」という表現を用いて，死が存在の本質であることを宣言している[22]。そして，最後に，それは etāsāṃ devatānām eko bhavati（彼は，これらの神格の一つになる）ということばで結んでいる。シャンカラは，この文句について，次のように注釈している——「さらに，死は果報の形態を帯びているから，これらの神格の一つになる。これが，このように知っている人の獲得する果報である」，と。スナールは，神格 (devatā) を suprême reálité objective の意味に解釈している。スナールの解釈が正しいかどうかは別として，わたくしは reálité について一言述べなければならない。Reálité には二つのニュアンスがある。一つは，ラテン語の *res*（＝事物・事柄）から派生したものであり，ドイツ語の Realität, 英語の reality は，これに相当する。もう一つの「現実」は，ドイツ語の Wirklichkeit である。この語は「作用すること」(Wirken) に由来し，英語の actuality がこれに相当する。スナールは devatā を suprême réalité objective と訳したが，もしも devatā が「最高の客観的現実」で

あるとすれば，それは *res* であるというよりもむしろ *Wirken* である。なぜなら，死は *res* であるよりもむしろ *Wirklichkeit* であるから。すでに見たように，われわれのウパニシャッドは死を「飢え」として実存主義的に理解した。実に，飢えは最高の現実であるからである！

I, 2, 7 (訳)——それは欲した，わたしのこの身体は祭祀に適したものになろう。わたしは，これによって自己をもつものになろう，と。それから，それ（身体）は馬になった。それはふくれた (*aśvat*) ので，馬祀祭に適したもの (medhya) になった。それが，馬祀祭 (Aśvamedha) の馬祀祭と呼ばれる所以である。これをこのように知っている人，この人はまことに馬祀祭を知っている。馬を囲い込まずに，それ（死）はそれのことを考えた。一年後に，それは自己自身のためにそれを屠殺した。それは，(馬祀祭で屠殺される，それ以外の) 犠牲獣を神々に引き渡した。それゆえ，人はプラジャーパティ（生類の主）に属するものとして，一切神に捧げられたものを屠殺する。ここで燃えるものは，まことに馬祀祭である。それの身体は歳である。ここの火はアルカ (arka) である。そのもろもろの身体は，これらの世界である。これらの二つは，祭火 (arka) と馬祀祭である。さらに，それはただ一つの神格，死にほかならない。彼は再死を避ける。この人には，死は到達しない。死はその人の自己になる。彼は，これらの神格の一つになる。

要　　約

I, 1, 1—2。ここでは，馬祭祀が問題になっている。馬祀祭に適した馬の頭はあけぼのであるという文句を始めとして，ここでは馬の身体の諸部分と自然現象・自然界との事物との同一視が説かれている。その際，注意しなければならないことは，馬と諸事物・諸事象が決して同一ではなく，両者がある一点において共通していることが示唆されていることである。ここでは，A と B が同一であるということが述べられているのではない。A は B ではない。A と B とは決定的に異なっている。ウパニシャッドは，A と B に共通した特定の項目を探求し，それを見いだそうと努めた。わたくしは，若干のテキストおよびシャンカラの注釈に拠って，初期ウパ

ニシャッドにおける思考方法を明らかにしようとした。

I, 2, 1—7。ここでは，馬祀祭との関連において，世界の創造が説かれている。ここの箇所で真にユニークなのは，「初めに」(agre) という表現である。世界の起源は，ここでは飢えとしての死である。死によって創造された世界は，当然，死自身から「流出」(sṛj) したのだから，死によって制約されている。死にとって最高に特徴的なのは，時間 (kāla) である[23]。われわれのウパニシャッドにおいては，歳 (saṃvatsara) が時間の象徴である。すべての事物は死のなかから産み出され，時の激流に棹さしている。世界存在は死をその本質としている。世界の起源は，飢えとしての死のなかに求められる。死が人間存在の淵源であることを知ることが，ウパニシャッド的な認識である。それゆえ，「死はその人の自己になる」(*mṛtyur asyātmā bhavati*) という表現は，死が世界存在の淵源であることの端的な認識にほかならない。ウパニシャッドは，人間存在が時間によって制約されている事実を実存主義的に解釈しようとしているのである。

〔注〕

1) ベートリンクのテキストは，ヴェーバー版に基づいて，みずから校訂したものである。それは，マーディヤンディナ版である。わたくしは，ベートリンク版も参照した。
2) 彼自身の編集した *The Sacred Books of the East* のなかの vol. XV. (1884) にブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドの英訳がある。今日，世界中でもっとも広く読まれているのは，恐らくマクス・ミュラーの英訳であろう。その訳文は流麗にして流暢，文学的にも香り高い。
3) ベートリンクのブリハッド・アーラニヤカの独訳は 1889 年，ドイッセンの訳は 1905 年に刊行された。ベートリンクは同じ年にこのウパニシャッドのマーディヤンディナ版を編集し，同時に独訳も刊行した。ベートリンクの独訳は，文献学的に正確である。ドイッセンの *Sechzig Upanishad's des Veda* は，ドイツ語圏では標準的な翻訳である。
4) スナールは 1934 年に *Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad* のテキスト，および訳を刊行した。スナールの仏訳は独創的で，しかも brilliant である。彼の訳は最高に優れていると思う。
5) ヒュームの *Thirteen Principal Upanishads* (1921)，およびラダクリシュナンの *Thirteen Principal Upaniṣads* (1953) は便利ではあるが，学術的なものではない。そのため，わたくしはここでは両書には全然言及しなかった。

6) 湯田豊訳，『アルタ・サングラハ』（神奈川大学人文学会〈人文学研究所報〉，1976 年 6 月，119 ページ。
7) アルブレヒト・ヴェーバーは *Die Taittirīya-Saṃhiâ*, Zweiter Theil (1872) のなかで，V, 7, 16 の ādityai pājasyaṃ に対して pâjasyam pâdatalam と注釈している。もしもヴェーバーの考えが正しければ，pājasya は「足の裏」を意味することになる。その場合には，われわれは「その足の裏は，大地である」と訳すことが出来る。
8) ヨーニは，元来，女性の性器・生殖器官を指して言うことばである。Vagina という語が，ヨーニに相当する。ここでは，派生的な意味で使用されている。
9) 例えば，シャタパタ・ブラーフマナ，V, 1, 4, 5 には adbhyo ha vā 'gre 'śvaḥ sambabhūva（まことに，初めに馬は水中から生じた），と述べられている。同じブラーフマナの XIII, 2, 2, 19 においては，apsuyonir vā aśvaḥ（まことに，馬は水中に発祥の地をもっている），と述べられている。
10) *Le Yoga immortalité et liberté*, 1954, p. 8.
11) Religonsgeschichtliches Lesebuch 9, *Vedismus und Brahmanismus*, 1928, p. 91——Es beschloß: ich will einer werden, der eine Persönlichkeit besitzt.
12) この点については，わたくしの「ウパニシャッドにおける知識論」（『インド宗教論』，第六章。八千代出版，昭和 50 年）参照。
13) チャーンドーギヤ・ウパニシャッド，VII, 10, 1——āpa evemā mūrtā yeyaṃ pṛthivī yad antarikṣaṃ yad dyaur yat parvatā yad devamanuṣyā yat paśavaś ca vayāṃsi ca tṛṇavanaspatayaḥ śvāpadāny ākīṭāpataṅga-pipīlakam āpa evemā mūrtā apa upāssveti. ここでも，水は形態を帯びたものになる（mūrta）のである。Tat samahanyata. sa pṛthivy abhavat という表現と，āpa evemā mūrtā yeyaṃ pṛthivī という発想とは，実質的にはまったく同じである。
14) 〔注〕，(13) 参照。チャーンドーギヤ・ウパニシャッド，VII, 10, 1 においては，水が凝結して地・空・天になったと述べられている。その際，神々，人間および動植物も凝結したと記されている。これらはすべてみな，水が凝結したものである。
15) チャーンドギヤ・ウパニシャッド，III, 16, 1—16 では，生気は Vasus, Rudras および Ādityas と等置されている。
16) 「注」，7) 参照。
17) Mithunaṃ samabhavad は，「性交をした」という意味である。シャタパタ・ブラーフマナ，XIII, 5, 2, 2 に引用されているヴァージャサネーヤ・サンヒター，XXIII, 20 の文句（vṛṣā vāji retodhā reto dadhātu）参照。シャタパタ・ブラーフマナのこの箇所では，mithuna は馬祀祭における馬と王の第一王妃（Mahiṣī）の性交を意味する。
18) ここでは，祭祀（yajña）の効力に対する絶対な信頼が認められる。しかし，やがて祭祀は否定的に解釈されるようになる。
19) 〔注〕，15) 参照。われわれのウパニシャッドの I, 2, 3 で述べられている sa eṣa prāṇas tredhā vihitaḥ は，われわれに prāṇa が Prajāpati にほかならないことを示唆する。

20) ブラーフマナは知識の重要性を強調する。祭祀を行なうだけでは決して十分ではない。祭式の意義を認識することが不可欠である——「まことに，もしもお前がこのこと（＝供物を捧げてから，なぜ，お前がさじを振るかということ）を知って火の祭り（Agnihotra）の供物を捧げたならば，それはお前によって捧げられたのだ。しかし，まことに（このことを）知らないで（火の祭りの供物を捧げたならば），それはお前によって捧げられなかったのである」（シャタパタ・ブラーフマナ，XI, 5, 3, 4）。

21) *apa* punar mṛtyuṃ *jayati* という文句を，ベートリンクは *apaḥ*. punarmṛtyuṃ jayati と改訂している。Apajayati は「避ける」，「克服する」という意味であるが，ベートリンクは apa を apaḥ（水）に改めてしまった。彼は so punar ekaiva devatā bhavati. mṛtyur evāpaḥ. punarmṛtyuṃ jayati と読み，Das Wasser ist der Tod. Wer solches kennt, der überwindet einen abermaligen Tod と訳した。わたくしは，ベートリンクの改訂は正しくないと思う。

22) シャタパタ・ブラーフマナ，X, 5, 2, 3 によれば，日輪のなかの人間が死にほかならない。そして，燃えている炎が不死である。「それゆえ，死は死なない」(tasmān mṛtyur na mriyate)。「なぜなら，死は不死なるものの内部にあるから」(amṛte hy antaḥ)。

23) ウパニシャッドは，すべての存在が死を本質としているという前提から出発した。そこにおいては，時の流れは恐るべき現実の力であるとみなされた。しかし，死から不死へ，時の激流を超えて無時間性のなかへ進むのがウパニシャッドの目標になった。ウォルター・カウフマンは，この点について次のように言っている——The enormous importance of the Upanishads lies in the fact that the intellectual elite of India denied that time was real, and that the Brahmins, who were priests and teachers, had no competition from prophets or secular teachers.——*Man's Lot*, 1978, Time is an Artist, p. 29.